巻頭特集

落語って、もしろい

RAKUGO

落語がかつてないブームになっている。
火付け役は20～30代のデジタル世代。
テレビドラマや漫画から落語に興味を持つ人が増え、
生で落語が聞ける寄席も増え続けている。
多くの人を惹きつける落語の魅力は何なのか。
唐人町商店街にある、甘棠館Show劇場で
月に1度商店街寄席を開催する
「内浜落語会」を取材した。

◀九月寄席でトリをつとめた四笑亭 楽狐さん

福岡の老舗 アマチュア落語一門

唐人町商店街寄席を主催する「内浜落語会」は1980年、福岡市の内浜小学校教員だった榎本隆さんが創立。以来40年、アマチュアの落語会として愛好者が集まっている。

現在会長を務めるのは、粗忽家勘心（そこつやかんしん）こと中村陽さん。2000年に内浜落語会に入門した。当時、何か習いごとを始めてみたいと考えていた勘心さんは、もともと落語を聞くのが好きだったこともあり、内浜落語会の寄席へ。「普段はプロの落語を聞いて耳が慣れていましたから、アマチュアのレベルはどんなものかと思いながら向かったんです」。しかし、そんな勘心さんの予想をはるかに超える出会いが。「まるで映像を見ているかのような気持ちにさせてくれる上手な噺家がいて、本当にびっくりしました」。もともと内浜落語会はアマチュアながら質の高い落語が聞けると評判の会だった。商店街寄席のほかにも、姪浜にあるお寺や公民館など、様々な場所からの依頼がくるほど。勘心さんは、「この時聞いた落語は、本当に江戸時代にいるような気分にさせてくれた」と振り返る。だからこそ、自分もここで落語に挑戦してみたいと思ったのが始まりだった。

お客さんとの一体感が醍醐味

現在、会には創立当初からのベテランや、つい数カ月前に入会した若手まで様々なキャリアを持つメンバーがいる。落語を趣味としている年齢層は比較的高いイメージがあったが、20代から70代まで幅広く在籍しているそう。勘心さんのように寄席を見て入会を決意した人は少なくないという。

稽古会は月に2回。独自に稽古を重ねてきた落語を実際にメンバーの前で披露し、アドバイスをもらい、演じる中で抑揚やテンポなど話し方を覚えていく。観客の想像力が重要になる落語は、イメージしやすいよう登場人物の演じ分けや仕草、目線などの動き一つひとつがとても大切だそうだ。

落語未経験だった勘心さんは、師匠である勘朝さんにまず「自分の好きな落語をよく聞き覚えるように」と教わったそう。「頭で思い出しながらではなく、勝手に口から出てくるように体が動くように、何度も何度も繰り返し稽古をしました」。

入会してしばらく経ったころ、次回の定席※の番組を決める稽古会で「落語を披露してみないか」と声をかけられたが、実は勘心さん、〝落語を覚える〟ことしか頭になく、この時まで人前で披露するということは考えてもいなかったという。

緊張の中、初めて挑んだ舞台では、思った以上にお客さんが笑い、確かな手ごたえを感じたのだとか。けれども「いわゆるビギナーズラックだったんですよ」と苦笑い。「実際2回目以降は欲が出てしまったんでしょうね。もっと笑わせたいという気持ちが急いてばかりで、ここぞという盛り上がりで会場がシーンと静まり返ってしまうことも多かったです」。

以来、もっとお客さんを笑わせられるように、理想の落語を聞かせられるようにと稽古を重ねた勘心さん。高座に上がるようになって数年が経ち、「ひさやま猪野さくら祭り」というイベントに呼ばれた時初めて、今までに感じたことのないようなお客さんとの一体感

を味わった。もちろん、ほとんどミスなく演じきった達成感もあったが、それ以上に落語を聞く人々のほとんどが夢中になってくれていたのが高座からも感じ取れたのだという。

「真剣に聞いてくれるお客さんがいて初めて最高の落語ができたのがこの時でした。今でもこのイベントからオファーがあると、必ず参加しています」と勘心さんにとって思い出深い一席となった。

落語を人前で演じたい人、噺を覚えたい人、一緒にイベントを作りたい人…、内浜落語会に参加している理由や楽しみ方は人それぞれ。しかし、全員に共通するのは〝落語好き〟だということ。「参加のハードルが低いが、本格的」なのが会の魅力のひとつだろう。

落語で笑いを広める

※定席とは、定期的に行われている寄席のこと。番組とはだれがどの順序で出るかというプログラムのこと

今や、落語は空前といってもよいほどのブームだ。2000年代から若い層のお客さんが急増し、関東圏では4軒ある定席での公演以外にも月に900件以上の落語会が開催されるようになった。福岡県内のホールでも独演会や寄席が頻繁に行われている。

勘心さんは内浜落語会の寄席以外にも、福岡市公認の「人権落語講師」として出前落語を行う。時には公民館で落語を通して人権問題や男女共同参画について伝えたり、小学校で披露したりと幅広い活動も。中でも前座噺として有名な『寿限無』は子どもに大ウケ。落語って難しいんじゃないの？と思いがちだが、老若男女誰でも楽しめる。

「落語は、江戸や明治の風情を楽しむもの」と語る勘心さん。さらに「今後福岡でも落語の面白さを広め、寄席がある文化を定着させていくことが目標です」と語る。

内浜落語会を創立した
粗忽家 勘朝さん

▲粗忽家 勘心さん

▲粗忽家 勘栄さん

▲粗忽家 す〆柑さん

▲粗忽家 勘江さん

自粛明けから3回目となる9月の商店街寄席。三味線、笛、太鼓の出囃子が鳴り響くなか、この日、挨拶に上がったのは「内浜落語会」を創立した粗忽家勘朝こと榎本隆さん。ニコニコとした笑顔と、軽快なトークで会場内に笑いを誘う。

開演前の挨拶が終わるといよいよ噺家が登場。高座に上がり、第一声。噺が進むほどに感じる息遣いや臨場感は、実際に寄席を訪れた人たちしか味わえないものだろう。「気軽に行ける」のが落語の魅力。まずは足を運びその世界を味わってみてはいかがだろうか。

落語用語豆知識

寄席

落語をはじめとした大衆芸能を興行する演芸場。そのほかにも定席ではないが、定期的に場所を借りて落語を行う「地域寄席」なども。内浜落語会は「商店街寄席」として、月に一度開催。11月の寄席で257回目。

ツばなれ

客数が10人を超えること。一つ（ひとつ）、二つ（ふたつ）…九つ（ここのつ）と数えて、十で「つ」が離れることに由来します。かつては内浜落語会メンバーも客席を見て「今日は“ツばなれ”した!」と喜ぶことが多かったと勘心さん。

亭号

落語家の高座名のうち、苗字にあたる部分のこと。入門した弟子は師匠の亭号をもらいます。内浜落語会一門の「粗忽家」は福教大の落語研究会の亭号で、OBだけでなく、勘朝さんの元に弟子入りした噺家も「粗忽家」の名前を冠しています。

マクラ

落語の冒頭にされる世間話や小咄。噺の本題に関連する内容が一般的で、観客に自然と落語の世界に入ってきてもらう役目を果たしています。

落語ってどんな噺？

寄席には行ったことはないけれど、テレビやラジオで落語を聞いたことがあるという人も多いのではないでしょうか。もとは「落とし噺」とも呼ばれ「オチ」が付くので落語となりました。落語家がたった一人で高座に上がり、身振り手振りで登場人物を演じ分け、聞き手は想像力を膨らませて楽しみます。ここでは特に有名な噺のあらすじを二席紹介します。

ある冬の深夜、江戸時代でいう九つ（0時のこと）の時刻。男が二八そば屋でちくわ入りのそばを頼む。男は屋台の看板を褒めたり、割られていない割り箸を褒めたりする。その後は、器、汁、麺の細さ、厚く切ったちくわなど何かにつけて褒め倒した。

食べ終わった男はそばの料金十六文を払おうとするが、そば屋に「生憎と細かい銭しか持ってねえんだ。落としちゃいけねぇ。手、出してくれ」と言って、手のひらにテンポよく乗せていく。「一、二、三、四、五、六、七、八…今、何時（なんどき）でぇ？」と銭を数えながら男は時間を尋ねる。すると「九つで」とそば屋。男は間髪入れずに「十、十一、十二…」と十六まで数え、スーッと店を去っていった。

それを見ていた別の男は、しばらくして先の男が代金を一文ごまかしていたことに気づく。えらく感心した男は、自分も試してみたくなるのだが…。

POINT

晩秋から冬にかけて多く演じられる噺。「主人公が誰かの真似をして粗忽な失敗をしてしまう」という落語に数ある典型的なパターンとなっています。「落語＝そばを食べる」というイメージを持つ人は多いですが、実はほかの噺に出てくることはあまりありません。

魚屋の勝五郎は、腕はいいものの酒好きで、仕事も飲みすぎで失敗が続く。ある日、仕事で向かった市場の浜で、大金の入った財布を拾う。有頂天になった勝五郎は自宅へ飛んで帰り、さっそく仲間を集めて大酒を飲む。翌日、それを見つけた女房は「こんなに飲んで支払いはどうするんだい」とおかんむり。勝五郎は拾った財布のことを説明するが、女房はそんなものは知らない、金欲しさのあまりに酔っぱらって夢を見たんだろうと言う。焦った勝五郎は家中財布を探すがどこにも見つからない。ついに夢と諦め、身の上を考えなおした勝五郎は死に物狂いで働き始めることに。

懸命に働いた末、立派な店を構えることが出来、生活も安定。身代も増えた。そんな年の大晦日の晩、女房は勝五郎に財布の件について告白を始める…。

POINT

三遊亭圓朝の三題噺が原作。三題噺とは、寄席で客から三つのお題を貰い、それらを絡めて、その場で作る即興の落語です。「芝浜」は夫婦の愛情を暖かく描いた屈指の人情噺として知られるようになり、噺のヤマが大晦日であることから、年の暮れに演じられることが多い作品です。

DATA

内浜落語会

HP http://www.sokotsuya.com/
@cHsYcHK1wLacmdW

唐人町商店街寄席

料 500円
所 甘棠館Show劇場
時 11/21（土）・12/19（土）
開場13:30　開演14:00
※12月は福岡市美術館 ミュージアムホール（福岡市中央区大濠公園1-6）にて開催

1/10（日）は
新春寄席開催決定!
普段の演目だけではなく、大喜利などいつもと違った番組。2021年、商店街から笑いを届けます!

甘棠館Show劇場

唐人町商店街のコミュニティの中核を担う場所として2000年にオープンした小劇場。2018年にはリニューアルし、さらに使い勝手の良い劇場へ。内浜落語会の寄席や様々な劇団の公演などが行われている。運営は劇団「ショーマンシップ」。商店街活性化のためにも、今やなくてはならない場所となっている。

☎092-737-1225
住 福岡市中央区唐人町1-10-1 カランドパーク2F
HP http://plaza-kantoukan.jp/index.html